

詞花集・後葉集 対照作者索引

付―「後葉和歌集の序について」

鈴木徳男

凡 例

一、本索引は、詞花集と後葉集における入集作者の対照を目的とする、上段が詞花集、下段が後葉集の入集作者の索引である。詞花集は六番目の勅撰和歌集、後葉集は詞花集を「破」という方法で批判した私撰和歌集。なお、両集の入集作者について比較検討した論文に、松野ゼミ「平安末期私撰和歌集の研究5」（立正女子短期大学『文芸論叢』8、昭和四七年）などがある。

二、詞花集は新編国歌大観（底本は高松宮本）を用いた。後葉集は天理図書館本（二類本）を基にしたが、独自の欠落部分は他の二類本を参照し、巻十八以下は書陵部本（一類本）を用いた。主要な異同あるいは一類本による場合などについては随時注記した（*印、書・天などの略号で示す。後葉集の伝本については後掲の「後葉和歌集の序について」を参照）。また、番号は便宜上、書陵部本を底本とする新編国歌大観により（大観で異本歌とする五九一〜五九六は天理本の順に組み込み）示してある。

三、主な体裁については次の通り。

1 索引項目は（ ）内の作者名に従い五十音順に掲げる。本文中の表記にこだわらず、氏・官職名などを省き、

名前を項目として、様々な呼び方が可能な場合もひとつ（一箇所）に統一している。なお、本文中の表記は項目の下に注記。一条院皇后宮、四条中宮、上東門院、新院、贈左大臣母など本文表記のままにした場合もある。

2 入集歌数と歌番号を掲げた後に、できるだけ作者の時代が判別できる程度の略伝を記した。

3 それぞれの集のみの作者については項目の頭に○印を付した。

4 両集が共有する歌は歌番号をゴチックで示す。（ただし、多数の場合、具体的対応は明らかにできない。）

四、本索引の作成に際し、詞花集については、松野陽一校注『詞花和歌集』和泉古典叢書7の作者略伝を参考にした。また、後葉集には「後葉集・統詞花集・雲葉集―作者索引」（『王朝文学』十九号昭和五〇年二月）がある。

あ

赤染衛門（あかぞめえもん）

九首

赤染衛門

五首

七・一一三・一六五・二四六・三一九・三二四・三

一一・一四五・一六七・二〇五・三九〇

六二・四〇二・四二〇

天徳頃―長久二年（一〇四二）頃。赤染時用女（実は平兼盛女か）。大江匡衡の妻となり江侍従らを生む。上東門院女房。中古三十六歌仙。赤染衛門集。玄々集。拾遺集初出。

安芸（あき）侍賢門院—— 一首

三九七

生没年未詳。橘俊宗女。侍賢門院（鳥羽中宮璋子）女房。郁芳門院安芸（忠俊女）と同人とみる。郁芳門院（白河皇女媞子）、前齋院（鳥羽皇女統子）女房。久安百首。郁芳門院安芸集。金葉集初出。

安芸 前齋院—— 二首

三四五・四三三

○頭方（あきかた）藤原—— 一首

四八六

生没年未詳。保元四年（一一五九）まで存命。頭輔男。母は高階能遠女。藏人、五位信濃守。千載集初出。

* 四八六は統詞花集七六〇。

○明賢（あきかた）源—— 一首

三一七

生没年未詳。大納言俊明男。四位彈正大弼。千載集のみ。

明兼（あきかね）坂上—— 一首

二四三

生年未詳—久安三年（一一四七）。範政男。五位明
法博士。詞花集初出。

*三二七は統詞花集四八七。

明兼 坂上—— 二首

一三八・三七八

○顯季（あきくに）源——朝臣 一首

一八〇

永保三年（一〇八三）—保安二年（一一二二）39。
国信男。母は高階泰伸女。四位左少将皇后宮権亮。
金葉集初出。

顯季（あきすえ）修理大夫—— 四首

七二・九〇・二二二・三七六

天喜三年（一〇五五）—保安四年（一一二三）69。
藤原隆経男。母親子は白河天皇乳母。正三位。六条
藤家の祖、白河院近臣。元永元年初めて人麿影供会

顯季 修理大夫—— 六首

五八・一〇四・一一三・一一四・一二〇・三四七

開催。堀河百首。六条修理大夫集。後拾遺集初出。

顯輔（あきすけ）左京大夫—— 六首

八八・三〇三・三三九・三四七・三八四・四一四。

寛治四年（一〇九〇）—久寿二年（一一五五）66。

藤原顯季男。正三位。詞花集撰者。久安百首。顯輔集。金葉集初出。

顯綱（あきつな）藤原——朝臣 四首

八六・九二・一一一・二二八

生年未詳—嘉承二年（一一〇七）頃。参議藤原兼経男。母弁乳母。讃岐典侍の父。正四位下讃岐守。白河・堀河朝に活躍。讃岐入道集。後拾遺集初出。

顯仲（あきなか）神祇伯—— 二首

四〇一・四一一

康平七年（一一〇六四）—保延四年（一一三八）75
（81説あり）。六条右大臣顯房男。母藤原定成女。

顯輔 左京大夫—— 八首

二八八・三四〇・四二七・四五九・四六〇・五六

二・五六七・五八三

*二八八、書は作者名なし。前歌「詭人不知」を受ける形になっている。

顯綱 藤原——朝臣 四首

一〇・一一八・一六九・三五三

顯仲 神祇伯—— 二首

四二二・四二三

待賢門院堀河らの父。堀河百首。大治三年広田社歌
合の主催者。金葉集初出。

顯仲女（あきなかのむすめ）神祇伯—— 一首

三六〇

生没年未詳。待賢門院堀河の姉妹。金葉集初出。

顯広（あきひろ）藤原——朝臣 一首

二三六

永久二年（一一一四）—元久元年（一二〇四）⁹¹。

権中納言俊忠男。葉室顯頼の養子となる。仁安二年
（一一六七）本流に復し俊成と改名。正三位皇太后

○顯仲（あきなか）藤原——朝臣 四首

一五一・一九九・三七二・四七二

康平二年（一一〇五九）—大治四年（一二二九）⁷¹。

権中納言資仲男。母は経頼女。従四位下左兵衛佐。

堀河百首。金葉集初出。

顯仲卿女 二首

二四六・五〇〇

*二四六、書は「顯仲卿妻」とする。五〇〇は諸本

「神祇伯顯仲女」。

顯広 藤原——朝臣 六首

二八・二六二・二七一・五九四・三七二・五八四

宮大夫。崇徳院の命で久安百首を部類。千載集撰者。長秋詠藻。詞花集初出。

章行女（あきゆきのむすめ）高階—— 一首

二五八

生没年未詳。素意法師妻。後拾遺集初出。なお、高松宮本は「高階章行朝臣女」。

○朝隆（あきたか）藤原——朝臣

一〇二

承徳元（一〇九七）——平治元年（一一五九）63。参議為房男。正三位権中納言。忠通家家司としてその

一首

章行朝臣女 高階—— 一首

三九一

○顕頼（あきより）民部卿—— 二首

三〇九・四二四

嘉保元年（一〇九四）——久安四年（一一四八）55。
葉室顕隆男。母は季綱女（鳥羽院乳母）。権中納言
正二位民部卿。鳥羽院近臣。

歌会歌合で活動。詞花集のみ。

敦輔王（あつすけおう）

一首

一一七

生年未詳—天永二年（一一一一）。敦貞親王子。神祇伯從三位。詞花集のみ。

有信（ありのぶ）藤原—朝臣

一首

四〇四

長曆三年（一〇三九）—承德三年（一〇九九）61
（60説も）。式部大輔実綱男。從四位下右中弁。詞
花集初出。

有仁（ありひと）花園左大臣

一首

○朝日尼（あさひのあま）

一首

五八〇

生没年伝未詳。

敦輔王

一首

一六五

有信 藤原—朝臣

一首

四二五

有仁 花園左大臣

一首

四三

康和五年（一一〇三）—久安三年（一一四七）45。
輔仁親王子。母は師忠女。妻は公実女。元永二年
（一一一九）源姓を賜って臣籍降下。詩歌管絃に巧
みで逸話が多い。金葉集初出。

六〇

○有基（ありもと）津守—

一首

五七三

生没年未詳。国基男。五位大隅守。千載集初出。

*五七三は統詞花集三七〇。

い

家経（いえつね）藤原—朝臣

三首

七五・三八三・三八九

正暦三年（九九二）—天嘉六年（一〇五八）67。参
議広業男。実母下野守安部信行女。資業の甥。正四
位下式部権大輔。玄々集。家経朝臣集。後拾遺集初
出。

家経 藤原—

一首

五六一

家時（いえとき）源——

一首

二一六

生没年未詳（部類に「至永久六年」）。淡路守盛長男。正五位下上野介。詞花集のみ。

家成（いえなり）左衛門督——

二首

九六・一四三

嘉承二年（一一〇七）—仁平四年（一一五四）48。

三位藤原家保男。母隆宗女。頭輔の甥。正二位中納言。鳥羽院の有力近臣。多くの歌合の主催者。詞花集初出。

和泉式部（いずみしきぶ）

一六首

一〇九・一二〇・一五八・一七三・二四〇・二四

九・二五〇・二五四・二六九・三一〇・三一一・三

一二・三二〇・三二六・三三三・三五七

貞元（九七六—九七七）頃—寛徳—永承（一〇四四—一〇五五）頃。越後守大江雅致女。小式部内侍の

家時 源——

一首

四〇六

家成 中納言——

一首

一九五

和泉式部

一〇首

一二六・一四四・三五七・三八六・四〇一・四四

八・四五二・四九九・五五八・五五九

母。橘道貞、藤原保昌の妻。上東門院女房。玄々集。和泉式部集。拾遺集初出。

出雲(いずも) 皇嘉門院—— 一首

二六一

生没年未詳。大内記藤原令明女。詞花集のみ。

出雲(いずも) 前齋院—— 一首

二四

前齋院は白河皇女令子。詞花集のみ。

伊勢大輔(いせのたいふ) 二首

二九・一六二

生没年未詳。康平三年(一〇六〇)生存。大中臣輔親女。高階成順の妻で康資王母の母。上東門院女房。玄々集。伊勢大輔集。後拾遺集初出。

〇一条院(いちじょういん)——御製 一首

出雲 皇嘉門院—— 一首

四一〇

出雲 前齋院—— 一首

四二

伊勢大輔 一首

二三四

一九二

天元三年（九八〇）—寛弘八年（一〇一一）32。円融天皇皇子。母東三条院詮子。第六六代天皇。玄々集。後拾遺集初出。

○一条院皇后宮（いちじょういんこうごうぐう） 一首

一七八

貞元元年（九七六）—長保二年（一〇〇〇）25。関白道隆女。母高階成忠女（高内侍）。定子皇后。玄々集。後拾遺集初出。

出羽弁（いでわのべん）

二首

一一四・三二五

生没年未詳。従五位下出羽守平季信女。後一条中宮威子、その皇女一品宮章子内親王家女房。六条斎院様子内親王家歌合の大部分に出詠。出羽弁集。後拾遺集初出。

出羽弁

一首

五九一

う

○馬内侍(うまのななし)

二首

二〇四・三八八

生没年未詳。源時明の女。養女か。斎宮女御をはじめ、大斎院選子内親王、一条院后定子などに出仕。中古三十六歌仙の一人。馬内侍集。拾遺集初出。

え

惠慶(えぎょう)——法師

二首

一六九・二四四

寛和頃の人。号播磨講師。玄々集。惠慶法師集。拾遺集初出。

惠慶——法師

一首

二四〇

○縁忍(えんにん)——法師

一首

五〇一

生没年伝未詳。

*五〇一、書は「冥仁法師」とする。

○円融院(えんゆういん)——御製 一首

三九五

天徳三年(九五九)——正暦二年(九九一) 33。村上

天皇皇子。母師輔女安子。第六四代天皇。玄々集。

円融天皇御集。拾遺集初出。

か

甲斐(かい) 太皇太后宮—— 二首

一八三・一八四

前中宮甲斐(前中宮越後)と同一人か(作者部類)。

詞花集のみ。

甲斐 太皇太后宮—— 一首

二五一

○懷円(かいえん)——法師 一首

八五

生没年未詳。源道濟男。叡山法師。袋草紙に名がみえる。後拾遺集のみ。

*八五、書は「能因法師」とする。

○戒秀（かいしゅう）——法師

一首

二五

生年未詳—長和四年（一〇一五）。清原元輔子。清少納言の兄。花山院殿上法師。花山院歌合に出詠。玄々集。拾遺集初出。

加賀左衛門（かがさえもん）

一首

八七

生没年未詳。加賀守丹波泰親女。母は菅原為理女。脩子内親王家女房。楳子内親王家歌合等出詠。後拾遺集初出。

覚雅（かくが）僧都——

二首

○戒名（かimei）——法師

一首

三二四

生没年伝未詳。

*三二四、天は「或命法師」とする。

加賀左衛門

一首

一一九

覚雅 僧都——

七首

一三・二〇七

寛治四年（一〇九〇）—久安二年（一一四六）57。

六条右大臣顯房子。東大寺法師。大治三年（一一二

八）伯顯仲西宮歌合出詠。久安百首作者となるが未

完成のうちに没。金葉集初出。

花山院（かざんいん）——御製

九首

四一・五七・七〇・八五・一〇六・二七六・三〇

〇・三三一・三五六

安和元年（九六八）—寛弘五年（一〇〇八）41。諱

師貞。冷泉天皇皇子。母は藤原伊尹女懷子。第六五

代天皇。玄々集。拾遺集初出。

三四・二〇八・二四五・三二八・三八二・三八七・

四一一

花山院 ——御製

二首

一三三・四九八

○兼綱（かねつな）藤原——

一首

一六二

永延二年（九八八）—天喜六年（一〇五八）71。道

兼男。正四位下。後拾遺集のみ。

*一六二、書は「藤原かねつね」。

○兼綱女(かねつなのむすめ) 藤原—— 一首

三七七

○かねつね 一首

三五〇

*三五〇、天は「藤原憲繩」。

兼昌 源—— 三首

一二七・二〇一・五六八

*五六八は作者名なしであるが、詞花集五四と同一歌。

兼昌(かねまさ) 源—— 二首

五四・一一二

生年未詳—大治三年(一一二八)以後没。撰津守源

俊輔男。前齋院尾張の父。従五位下皇后宮少進。忠

通家歌壇の常連。金葉集初出。

兼盛(かねもり) 平—— 六首

三・一四・一三六・一五一・一九一・二〇一

生年未詳—正暦元年(九九〇)。兵部大輔平篤行男。

従五位上駿河守。天曆期に活躍。三十六歌仙の一。

屏風歌が多い。兼盛集。後撰集初出。

兼盛 平—— 一六首

六・一八・二五・二六・四九・八六・一九一・二一

四・二三二・二三三・二九五・三一五・三一九・三

七九・四四三・五六〇

○寛念(かんねん)——法師

一九七

一首

詞花集のみ。高松宮本は「寛念法師」とする。

き

紀伊(きい)一宮——

二首

二一・二四二

寛治・康和頃の人。永久元年(一一一三)生存。平

経重女(作者部類)。一宮(祐子内親王家)女房。高

陽院歌合、堀河百首。一宮紀伊集。後拾遺集初出。

行尊(ぎょうそん)大僧正——

二首

二六〇・三六三

天喜三年(一〇五五)——長承四年(一一三五)81。参

○河内(かわち)前斎宮——

二首

九一・九八

生没年未詳。

紀伊 一宮——

三首

四三・二四三・三八九

行尊 大僧正——

四首

二七〇・四〇五・四三七・五四九

議源基平子。小一条院の孫。園城寺長吏・天王寺別當・天台座主。白河・鳥羽・崇徳三代の護持僧。若き日山伏修験の無双の行者として知られ、和歌・管絃・書道に堪能。行尊大僧正集。金葉集初出。

公実(きんざね) 大納言――

四首

二三・二一七・二九九・四一九

天喜元年(一〇五三)――嘉承二年(一一〇七) 55。

大納言藤原実季男。母は経平女。号三条大納言。閑院流の祖。実行・通季・実能・待賢門院璋子らの父。正二位東宮(鳥羽)大夫。堀河百首。公実集

○清輔(きよすけ) 藤原――

六首

三三・七八・一六〇・二二三・二九〇・三四四

長治元年(一一〇四)――治承元年(一一七七) 74。

頭輔男。母は高階能遠女。久安百首。著作に奥義抄、和歌一字抄、袋草紙、和歌初学抄など。統詞花集の撰者。清輔朝臣集。千載集初出。

公実 東宮大夫――

五首

一一・五四・一五四・一九八・四〇七

(零本)。後拾遺集初出。

○公誠(きんざね) 平——

二五二

生没年未詳。長和元年(一一二二)生存。陸奥守元平男。従五位下周防守。花山院別当。玄々集。拾遺集初出。

公重(きんしげ) 藤原——朝臣

一首

三五〇

生年未詳——治承二年(一一七八)60?。大納言通季男。母忠教女。実能の養子。正四位下右少将。通称梢少将。崇徳院歌壇から高倉天皇期歌壇にかけて活動。風情集。詞花集初出。

公任(きんとう) 前大納言——

四首

一三九・一六八・二〇六・三九二

公重 藤原——朝臣

一首

四八五

公任 前大納言——

六首

二四七・二四八・五〇四・五〇八・五〇九・五二三

康保三年（九六六）―長久二年（一〇四一）76。廉義公（頼忠）男。定頼の父。道長時代の歌壇の指導者で、新撰髓脳・和歌九品・拾遺抄・和漢朗詠集などの編著がある。公任集。拾遺集初出。

公教（きんのり）大納言― 一首

六一

康和五年（一一〇三）―永暦元年（一一六〇）58。八条太政大臣藤原実行男。母は顯季女。後三条内大臣。大治三年（一一二八）西宮歌合に出詠。金葉集初出。

公教 大納言― 一首

九四

*九四、書は「中納言公教」とする。

○公保（きんやす）藤原―朝臣 一首

一〇八

長承元年（一一三一）―安元二年（一一七六）45。

実能男。母は通季女。正二位権大納言。

*一〇八、天は作者名なし。

公行（きんゆき）右兵衛督—— 一首

一〇

長治二年（一一〇五）—久安四年（一一四八）44。

八条太政大臣藤原実行男。母は顯季女。從三位参議。詞花集初出。

公能（きんよし）左兵衛督—— 一首

一九四

永久三年（一一一五）—永曆二年（一一六一）47。

徳大寺左大臣藤原実能男。母は顯隆女。正二位大炊御門右大臣。実定・実家・多子・忻子の父。崇徳院歌壇の常連。久安百首。学才に秀で、管絃・朗詠の名手。詞花集初出。

く

国信（くにざね）中納言—— 一首

二六二

延久元年（一一〇六九）—天永二年（一一一一）43。

公行 右兵衛督—— 三首

二二・五六・五三二

* 二二、天は欠く。

公能 右衛門督—— 二首

一九六・三三二

* 一九六は彰・静・三・神・類によると「右衛門督公裕」。

国信 中納言—— 一首

三二三

右大臣源頼房男。正二位権中納言。堀河天皇内裏歌壇の中心。康和二年(一一〇〇)国信家歌合主催。堀河百首・懐旧百首。金葉集初出。

国基(くにもと) 津守――

二首

一七七・三七五

治安三年(一一二三)――康和四年(一一〇二)80。

神主津守基辰男。住吉社第三九代神主。従五位下。

白河親政に接近。歌道津守家の祖。国基集。後拾遺集初出。

け

源心(げんしん) 天台座主――

一首

○国房(くにふさ)

一首

九六

生没年未詳。承保四年(一一七七)出家。藤原範光男。後拾遺集初出。

国基 津守――

一首

二四九

源心 天台座主――

二首

二七七

天禄二年（九七二）——天喜元年（一〇五三）83。院源・寛慶の弟子。西明房。第三〇代天台座主。大僧都。後拾遺集初出。

二五七・四九三

○賢智（けんち）——法師

一首

三六八

醍醐源氏陸奥守家俊子か。詞花集初出。

○玄範（げんはん）——法師

一首

一八〇

醍醐寺。詞花集のみ。

こ

小一条院（こいちじょういん）——御製

一首

二九〇

正暦五年（九九四）——永承六年（一〇五一）58。三条天皇皇子。母は皇后城子（済時女）。行尊・行宗

小一条院

四五八

一首

の祖父。後一条天皇の東宮だったが、寛仁元年（一〇一七）道長によって辞退させられた。玄々集。後拾遺集初出。

○江侍従（こうじじゅう）

一首

三一七

大江匡衡女。母は赤染衛門。藤原兼房・高階業遠らと結婚。玄々集。後拾遺集初出。

高内侍（こうのないし）

一首

三四〇

生年未詳―長徳二年（九九六）。従二位高階成忠女。貴子。円融天皇内侍。道隆室。伊周、隆家、定子の母。拾遺集初出。

○小式部内侍（こしきぶのないし）

一首

二八〇

生年未詳―万寿二年（一〇二五）25位か。陸奥守橘

高内侍

五二七

一首

道貞女。母は和泉式部。教通、公成の妻。上東門院女房。玄々集。後拾遺集初出。

○後白河院(ごしらかわいん)御製 一首

二三七

大治二年(一一二七)―建久三年(一一九二) 66。
久寿二年から保元三年まで在位、二三七詞書に「今上」と記されている。千載集初出。

○小大進(こだいじん) 五首

二三・二八九・五四三・五五六・五七一

生没年未詳。菅原在良女。母は三宮輔仁親王家女房。有仁に仕える。大宮小侍従らの母。

○小大君(こだいのきみ) 二首

四五一・四八九

生没年未詳。三条院の東宮時代に女藏人として仕える。小大君集。拾遺集初出。

* 四八九は統詞花集九二〇。

○近衛院(このえいん)——御製

八首

二一六・二八一・二八二・三〇六・三二八・四九

五・五八一・五八六

保延五年(一一三九)——久寿二年(一一五五) 17。

鳥羽天皇皇子。第七六代天皇。体仁。在位、永治元

年(一一四二)——久寿二年。千載集初出。

伊家 藤原——

三首

九五・一五九・三三一

伊家(これいえ) 藤原——

三首

六〇・一二五・一九三

永承三年(一一〇四八)——応徳元年(一一〇八四) 37

(43、44説あり)。周防守公基男。母は範永女。正

五位下右中弁民部大輔。白河院近臣。後拾遺集初

出。

○後冷泉院(これいぜいん)——御製

一首

四一七

万寿二年（一〇二五）—治暦四年（一〇六八）44。
後朱雀天皇皇子。諱親仁。第七〇代天皇。後拾遺集
初出。

惟成（これしげ）藤原—

三首

二・一三七・一九五

天曆七年（九五三）—永祚元年（九八九）37。右少
弁雅材男。正五位上權左中弁。花山院近臣。院退位
後出家。惟成弁集。拾遺集初出。

伊周（これちか）帥前内大臣

二首

三〇八・三八八

天延二年（九七四）—寛弘七年（一〇一〇）37。中
関白藤原道隆男。母は貴子（高階成忠女）。正二位
儀同三司。帥内大臣。玄々集。後拾遺集初出。

伊通（これみち）大納言—

一首

三四三

惟成 藤原—

三首

五・三六〇・三七〇

伊周 帥前内大臣

一首

二六六

伊通 大納言—

一首

一八五

寛治七年（一〇九三）—長寛三年（一一六五）73。

大納言宗通男。母は顯季女。久安六年（一一五〇）

大納言。正二位大宮太政大臣。金葉集初出。

カ

○濟慶（さいきょう）律師——

一首

二八七

寛和元年（九八五）—永承二年（一〇四七）63。参

議藤原有国子。広業・資業と兄弟。第一六代東大寺

別当。玄々集。金葉集初出。

（西行↓よみびとしらず 三七二）

○西行（さいぎょう）——法師

一首

二六七

元永元年（一一一八）—建久元年（一一九〇）73。

佐藤康清男。俗名、義清。二三歳で出家。山家集。

最敵（さいごころ）——法師

一首

二五三

最敵 ——法師

一首

三八〇

生没年未詳。越中守藤原雅弘子。叡山阿闍梨。詞花集のみ。

相模(さがみ)

四首

八〇・二五五・二七〇・三三二

長徳・長保(二〇〇〇)頃―天喜(二〇五三)頃か。源頼光女。母は慶滋保章女。橘則長、大江公資の妻。後冷泉朝歌壇で活動。玄々集。相模集。後拾遺集初出。

相模

一〇九・三九三・四七六

三首

○定成(さだなり)藤原―朝臣

一首

八〇

長和二年(二〇一三)―応徳二年(二〇八五)出家。73。明元男。従五位下肥前守。神祇伯頭仲の母は定成女。千載集のみ。

○定信(さだのぶ)源―

二首

二〇三・二二三

生没年未詳。信宗男。従五位上刑部大輔。忠通家歌
合の常連。金葉集初出。

*二〇三は統詞花集二八六。

○定頼(さだより) 中納言—— 一首

五〇七

長徳元年(九九五)——寛徳二年(一〇四五) 51。公
任男。母は四品昭平親王女。権中納言正二位兵部
卿。定頼集。後拾遺集初出。

*五〇七は統詞花集八一八。

実方 藤原——朝臣 二首

三六八・四九二

実方(さねかた) 藤原——朝臣 三首
一八八・二三七・三五二
生年未詳——長徳四年(九九八)。侍従藤原定時男。
母は左大臣雅信女。正四位下左中将。花山院近臣。
陸奥の任地で没。実方集。拾遺集初出。

○実定(さねさだ) 中原—— 一首

実重(さねしげ) 平——

一首

二二二

生没年未詳。宮内大輔昌隆男。從五位上。近衛天皇藏人。詞花集初出。

実行(さねゆき) 太政大臣

二首

二九三・三六九

承暦四年(一〇八〇)―応保二年(一一六二) 83。
権大納言藤原公実男。八条前太政大臣。妻は顯季女。元永元年(一一一八)家歌合を主催。金葉集初出。

実能(さねよし) 内大臣

一首

二九五

永長元年(一〇九六)―保元二年(一一五七) 62。

二二八

* 二二八、書は「中原かねさた」。

実重 平——

一首

五五七

実行 太政大臣

四首

三〇四・四五六・四五七・五三〇

実能 内大臣

二首

一〇六・四六三

大納言藤原公実男。従一位左大臣。通称徳大寺左大臣。金葉集初出。

三条院(さんじょういん)——御製 一首

九七

貞元元年(九七六)——寛仁元年(一〇一七)42。冷泉天皇皇子。母は超子(兼家女)。第六七代天皇。諱居貞。在位、寛弘八年(一〇一一)——長和五年(一〇一六)。後拾遺集初出。

し

三条院——御製 二首

一二九・一四二

○重家(しげいえ)藤原—— 一首

二三八

頭輔男、清輔の弟である重家(大治三年—治承四年)のことか。詞書によると、後白河院の親王時代の作である。

*二三八、書は「藤原しげすゑ」。

重基（しげもと）藤原——

一首

九九

生年未詳—長承三年（一一三四）。近江守有佐男。

從五位上中務少輔。忠通家歌合出詠。詞花集初出。

重之（しげゆき）源——

二首

六・二二一

生年未詳—長保年間（一〇〇〇）頃。源兼信男（兼

信兄の兼忠子となる）。從五位下相模權守。冷泉東

宮の時、帶刀先生として百首を詠む。陸奥で没。重

之集。拾遺集初出。

○四条中宮（しじょうちゅうぐう）

二首

三五五・四〇七

天徳元年（九五七）—寛仁元年（一〇一七）61。廉

義公（頼忠）女。母岐子女王。遵子。円融院皇后。

公任の妹。玄々集。後拾遺集初出。

重基 藤原——

一首

一三四

重之 源——

一首

二〇〇

順（したごう）源——

一首

九四

延喜一一年（九一一）—永觀元年（九八三）73。左馬允拳男。從五位上能登守。梨壺の五人の一人。後撰集撰者。天徳内裏詩合・歌合出詠。倭名類聚抄。順集。拾遺集初出。

治部卿（じぶのきょう）皇嘉門院——

一首

六五

生没年未詳。兵部少輔源信綱女。從三位盛子。経信の曾孫。心覚の姉妹。琵琶の名手。詞花集のみ。

順源——

一首

七

○信濃（しなの）関白家——

一首

三〇八

治部卿 皇嘉門院——

一首

一五八

○寂然（じやくぜん）——法師

一首

四一九

永久末から保安頃（一一一七—一一二三）生まれ。

○寂昭（じゃくしょう）——法師

一首

一八一

生年未詳—長元七年（一〇三四）。參議大江齊光子。

俗名定基。從五位下三河守。寛和二年（九八六）出家。入宋して没。玄々集。後拾遺集初出。

俊恵（しゅんえ）——法師

一首

一一二

永久元年（一一一三）—没年未詳。（建久二年以前

没。同六年没説あり）。源俊頼子。歌林苑主權者。

林葉集。詞花集初出。

没年未詳、寿永元年（一一八二）には生存。為忠

男、寂超（為経）弟。常盤三寂の一。俗名頼業。唯

心房。千載集初出。

* 「読人しらず」のうち六首（五七・一一〇・一六一・三二一・三六一・五〇三）が家集により寂然作と知られる。

俊恵——法師

一首

三三二

清胤（しょういん）僧都——

二首

八三・一八二

天慶七年（九四四）—長徳二年（九九六）53。参議

大江朝綱子。天王寺别当。玄々集。金葉集初出。

○清昭（しょうしょう）法橋——

一首

三五九

生年未詳—長保五年（一〇〇三）。従三位高階成忠子。明順と兄弟。延暦寺。玄々集。詞花集のみ。

成尋（じょうじん）——法師

一首

一五九

寛弘八年（一〇一一）—永保元年（一〇八一）71。

藤原義賢（実方男）男。母は源俊賢女。石蔵大雲寺。六十二歳で入宋し没。詞花集初出。

浄蔵（じょうぞう）——法師

一首

二〇〇

清胤 僧都——

一首

二五九

*二五九、書は「僧都清胤」。

成尋 ——法師

一首

四七四

浄蔵 ——法師

一首

三五八

寛平三年(八九一)―承保元年(九六四) 74。参議
三善清行子。母は嵯峨天皇孫女。験者。名譽歌仙
(和歌色葉)。拾遺集初出。

○上東門院(じょうとうもんいん)

一首

四一八

永延二年(九八八)―承保元年(一〇七四) 87。法
成寺道長女。母倫子。彰子。一条院皇后。後一条・
後朱雀の母。玄々集。後拾遺集初出。

○少輔内侍(しょうのないし)

一首

二四四

伝未詳。二四四は保延元年(一一三五)家成家歌合
の出詠歌。

○勝範(しょうはん) 天台座主――

一首

四三六

長徳二年(九九六)―承保四年(一〇七七) 82。吉

白河院（しらかわいん）——御製 一首

二七

天喜元年（一〇五三）——大治四年（一二二九）77。

三条天皇皇子。諱貞仁。第七二代天皇。後拾遺・金葉の撰進下命。後拾遺集初出。

新院（しんいん）——御製 七首

八・五〇・一二六・二二九・二九二・三七九・四〇三

元永二年（一一一九）——長寛二年（一一六四）46。

鳥羽天皇皇子。諱頭仁。保元の乱（一一五六）後、

讃岐に流され没。讃岐院・崇徳院。久安百首などの百首を主催。詞花撰進下命。詞花集初出。

美氏。第三代天台座主。後三条院護持僧。千載集のみ。

白河院 ——御製 一首

四一

* 四一、書は「堀河院御製」とする。

新院 ——御製 一二首

八・二四・三七・三九・二七三・三〇二・三三九・

三六二・三六九・五三四・五五二・五七六

* 三三九は統詞花集五二五。

○信永（しんえい）——法師 一首

五八七

○心覚(しんかく)——法師 一首

二三四

生没年未詳。兵部少輔源信綱子。皇嘉門院治部卿の

兄弟。阿闍梨。叡山の僧。永万頃まで活動。詞花集

初出。

生没年伝未詳。

○新少将(しんしょうしょう)

二二二

一首

生没年伝未詳。

*二二二、天は「小少将」とする。

す

○季経(すえつね)藤原——

二二六

一首

天承元年(一一三一)——承久三年(一一二二) 91。

頭輔の末子。季経集。千載集初出。

○季遠(すえとお)源——

一首

一五

生没年未詳。宮内丞源重時養子。内舍人左兵衛尉、

平忠盛青侍、後白河院武者所北面。詞花集のみ。

○季政(すえまさ)源——

一首

五〇二

生没年伝未詳。

季通(すえみち)藤原——朝臣

一首

三四六

嘉保く永長(一〇九四く六)頃生—保元三年(一一

五八)生存。大納言藤原宗通男。母は顯季女。正四

位下備後守。音曲の名手。久安百首。季通集。詞花

集初出。

季通 藤原——朝臣

三首

一九二・三四三・四九四

周防内侍(すおうのななし)

三首

五五・一一六・三三〇

周防内侍

三首

五五・八八・五二六

生年未詳―天仁二年（一一〇九）頃没、70位か。周
防守平棟仲女。後冷泉・白河・堀河帝に仕える。通
俊・顯季らと親交があつた。周防内侍集。後拾遺集
初出。

○祐拳（すけたか）平――

二二三

生没年未詳。越前守平保衡男。従五位下駿河守、越
中守。道長家の家司。玄々集。拾遺集初出。

輔尹（すけただ）藤原――朝臣

二首

一七五・三〇四

天曆ノ天徳（九四七～九六〇）―寛仁末（一〇二
一）頃。大和守貞方男（興方男とも）。懐忠養子。
従四位下大和守。輔尹集。本朝麗藻。玄々集。拾遺
集初出。

輔尹 藤原――朝臣

二首

二二七・四四二

* 四四二、書は「すけまさ」。

○輔親（すけちか）祭主――

一首

資業(すけなり) 式部大輔――

一首

三三九

永延二年(九八八)――延久二年(一〇七〇) 83 (81
説も)。参議藤原有国男。母は仲遠女。広業弟。家
経・経衡の叔父。従三位日野式部大輔。永承六年
(一〇五一) 出家後日野に隠棲。長元八年頼通歌合
出詠。後拾遺集初出。

四四一

天曆八年(九五四)――長曆二年(一〇三八) 85。大
中臣能宣男。母は藤原清兼女。長保三年(一〇〇〇
一) 祭主。輔親集。拾遺集初出。

資業 式部大輔――

一首

五七二

○輔仁(すけひと) 延久第三親王、三御子(親王) 八首
一・六九・二五三・三二九・四七七・四七八・五六
四・五六五
延久五年(一〇七三)――元永二年(一一一九) 47。
後三条天皇第三皇子。金葉集初出。

資通(すけみち) 大弐――

一首

一四二

寛弘二年(一〇〇五)――康平三年(一〇六〇) 56。

從三位源濟政男。母は頼光女。從二位參議。祐子内親王歌合講師。笛の名手。後拾遺集初出。

○相如(すけゆき) 藤原――

二首

二二三・三九四

生年未詳――長徳元年(九九五)。右中将相信(助信)男。正五位下出雲守。相如集。玄々集。詞花集初出。

せ

○清少納言(せいしょうなごん)

二首

二六五・三一六

康保三年(九六六)頃――治安(万寿)一〇二一(一〇二八)頃か。清原元輔女。橘則光妻。則長母。一条中宮定子女房。枕草子。清少納言集。玄々集。後

資通 前太宰大弐

一首

二〇七

拾遺集初出。

撰津(せつつ)

一首

三七

藤原実宗女。二条太皇太后宮(令子内親王)女房。

寛治八年賀陽院歌合、元永二年忠通歌合に出詠。撰

津集。金葉集初出。

瞻西(せんさい)——法師

一首

一五〇

生年未詳——大治二年(一一二七)。叡山の僧。天治

初年(一一二四)頃雲居寺を開く。説経にすぐれて

いた。永久四年(一一一六)雲居寺結縁経後宴歌合

主催。金葉集初出。

○選子内親王(せんしなしいしんのう)

一首

四一〇

康保元年(九六四)——長元八年(一一三五)72。村

撰津

一首

五九

*一一六を天は「太皇太后宮撰津」とする。

瞻西——上人

一首

二〇六

上天皇皇女。母は安子（節輔女）。大齋院。天延三年（九七五）齋院卜定。長元四年（一〇三一）出家。大齋院御集・発心和歌集。玄々集。拾遺集初出。

そ

○増基（ぞうき）——法師

三首

五一・三五三・三六五

天曆（九四七～五六）頃の人。聖源父。増基法師集

（庵主）作者。後撰歌人は別人であらう（袋草紙）。

後拾遺集初出。

贈左大臣母（ぞうさだいじんのはは）

一首

三三

生没年未詳。従三位藤原経平女。顕季の室。長実・

顕輔の母。金葉集初出。

贈左大臣母

三〇・一八八

二首

た

大式(だいに) 太皇太后宮—— 一首

七九

藤原通宗女。母は大式三位女か。二条太皇太后宮令
子女房。二条太皇太后宮大式集。金葉集初出。

○大進(だいしん) 俊子内親王家—— 一首

二五七

生没年未詳。系譜不詳。詞花集のみ。

○大式三位(だいにのさんみ) 一首

三二七

生没年未詳。山城守藤原宣孝女。母は紫式部。賢
子。後冷泉院乳母。大式三位集。拾遺集初出。

○帥(そち) 美福門院——

一首

五九三

生没年伝未詳。

大式 太皇太后宮——

一首

一〇五

隆季（たかすえ）藤原——朝臣 一首

二八五

大治二年（一一二七）—元暦二年（一一八五）59。

中納言家成男。正二位権大納言太宰帥。久安百首。

建春門院北面歌合。詞花集初出。なお、隆季集は私

撰集。

隆季 藤原——朝臣 一首

四八三

○隆資（たかすけ）藤原—— 一首

六三

生年未詳。康和元年（一一九九）没。頼政男か。母

は藤原相如女。晩年出家して武蔵入道観心と称す。

後拾遺集初出。

* 六三、書は「藤原隆頼」。

隆経（たかつね）藤原——朝臣 一首

三九〇

生没年未詳。延久四年（一一七二）生存、65位か。

美濃守頼任男。母は濟家女。妻親子は白河院乳母。

隆経 藤原——朝臣 一首

二六八

顯季の父。正四位下。六条家の遠祖。後拾遺集初出。

高遠（たかとお）大式—— 一首

七三

天曆三年（九四九）—長和二年（一〇一三）65。参議藤原齐敏男。母は播磨守平尹文女。実資の兄。正三位太宰大式。高遠集。玄々集。拾遺集初出。

○高松上（たかまつのうえ） 一首

三〇九

康和二年（九六五）—永承四年（一〇四九）85。西宮左大臣源高明女。母は師輔女。明子。道長妻。頼宗・長家の母。玄々集。金葉集初出。

高遠 大式—— 一首

一〇三

○高光 少将藤原—— 二首

二〇九・二五五

天慶三年（九四〇）頃—正曆五年（九九四）55。師

隆頼（たかより）惟宗——

二首

一四五・一四六

六位大学頭。詞花集のみ。

* 一四六は後葉集では俊頼作（五五〇）として入集。

忠兼（ただかね）藤原——

二首

五六・一〇五

生没年未詳。伯耆守隆忠（顕季弟）男。従五位下肥

後守。顕輔、家成家など六条家系歌合で活動。詞花

集初出。

○忠清（ただきよ）藤原——

一首

三二一

輔男。左近衛少将従五位上。天徳四年（九六〇）出家。高光集。拾遺集初出。

* 「如覚法師」としても二首（四五〇・五一〇）入集。

隆頼 惟宗——

一首

二一〇

忠兼 藤原——

二首

八九・一三五

* 一三五、天は「藤原忠宣」、詞書も異なる。

治暦元年（一〇六八）―没年未詳。永久三年（一一一五）48出家。藤原清綱男。正五位下刑部大輔。詞花集のみ。

忠季（ただすえ）源――

二首

三四・六七

生没年未詳。神祇伯頭仲男。母は源俊輔女。正五位下宮内大輔。忠通家・頭輔家歌合出詠。金葉集初出。

忠通（ただみち）関白前太政大臣

七首

四八・一五七・一八七・二四八・三八一・三八二・

四一三

承德元年（一〇九七）―長寛二年（一一六四）68。

富家関白忠実男。号法性寺入道。忠通集。法性寺殿御集。金葉集初出。

忠季 源――

一首

三一

忠通 関白前太政大臣

一四首

四〇・七六・二二二・二二四・二三〇・二七二・二

九七・三四六・三六六・三七六・四四〇・五三一・

五四四・五八二

○忠宗（ただむね）源――

一首

四四七

忠盛(ただもり)平——朝臣

二首

二七五・二九七

永長元年(一〇九六)——仁平三年(一一五三) 58。

讃岐守平正盛男。清盛の父。正四位上刑部卿。久安

百首。忠盛集。金葉集初出。

忠盛 平——朝臣

二首

二六五・四一七

○為言(ためこと)藤原——

一首

四三九

生没年未詳。散位従五位下。後拾遺集初出。

* 四三九は統詞花集一六〇。

為実(ためさだ)藤原——

一首

二八八

生没年未詳。信濃守永実男。為真とも。号生西。従

五位下肥前守。元永く永万の歌合に出詠。金葉集初

出。

為実(真)藤原——

二首

一八四・四六四

○為忠(ためただ) 藤原——朝臣 六首

一七五・一九七・三〇五・三五四・四六一・四八二
生年未詳—保延二年(一一三六)没か。知信男、母
は有佐女。三叔の父、すなわち本集撰者の父。

○為忠朝臣母(ためただあそんのはは) 一首

四三四

* 四三四、書は「為忠朝臣」。

○為経(ためつね) 藤原—— 一首

五〇六

永久元年(一一一三)頃生まれか。治承四年(一一
八〇)までは生存。為忠男、母は安芸。康治二年
(一一四三)出家。寂超。本集撰者。千載集初出。

為仲(ためなか) 橘——朝臣 二首

一一一・三三八

生年未詳—応徳二年(一一八五)。筑前守義通男。

為仲 橘——朝臣 二首

二六三・二六四

正四位下太皇太后宮亮。和歌六人党の一人で後冷泉朝に活動。為仲集。後拾遺集初出。

○為基(ためもと) 大江——

一首

二四一

参議齊光男。永祚元年(九八九)頃、摂津守を退任して出家。正五位下。定基(寂昭)の兄。玄々集。

○為業(ためなり) 藤原——

一首

一九三

生没年未詳。為経、頼業(寂然)の兄。保元三年(一一五八)から仁安元年(一一六六)の間に出家。常盤三寂の一。千載集初出。

○丹後(たんご) 太皇太后宮——

一首

一一六

生没年伝未詳。

* 一一六、天は「太皇太后宮摂津」。

拾遺集初出。

○為義(ためよし) 橘——朝臣

一首

二九八

生年未詳—寛仁元年(一〇二七)。近江掾内蔵助道

文男。為仲祖父。道長家家司。正四位下丹波守。本

朝麗藻。玄々集。後拾遺集初出。

ち

○親定女(ちかさだのむすめ) 祭主——

一首

二八五

生没年伝未詳。

*二八五、静・神・三・類は「祭主親定母」。

親隆(ちかたか) 藤原——朝臣

一首

二二八

康和元年(一〇九九)—長寛三年(一一六五) 67。

大蔵卿為房男。正三位参議。通称四条宰相。忠通家

親隆 藤原——朝臣

四首

一四一・三三八・三四二・三八三

家司で同家歌壇で活躍。久安百首。為忠百首。親隆集は久安百首歌。金葉集初出。

親元(ちかもと)源——

一首

三五四

生没年未詳。五位安房守(作者部類)。詞花集のみ。

○親房(ちかふさ)源——

一首

五八九

生没年未詳。久安五年(一一四九)生存か。仲房男。神祇伯頭仲の孫。従五位上。金葉集初出。

親元 源——

一首

四九六

*四九六、書は「源ちかみつ」。

○中納言女王(ちゅうなごんのによおう)

一首

四六

生没年未詳。小一条院敦明親王女。後三条院乳母。後拾遺集初出。

*四六は統詞花集四二。

○経信(つねのぶ) 大納言――

一首

一七一

長和五年(一〇一六)――承德元年(一〇九七) 82。

中納言源通方男。正二位大納言。太宰権帥。後冷泉朝から院政初期にかけての歌壇の重鎮。皇后宮扇合・高陽院七番歌合判者。難後拾遺。帥記。経信集。後拾遺集初出。

○経衡(つねひら) 藤原――

一首

七一

寛弘二年(一〇〇五)――延久四年(一〇七二) 68

(承暦元年以降没説アリ)。中宮大進公業男。正五位下筑前守。和歌六人党の一人。経衡集。後拾遺集初出。

○経信卿母(つねのぶぎょうのはは)

五四二

一首

と

道命(どうみょう)——法師

九首

四・三二・五八・一二八・一三四・二一五・二二二・二三三・三八七

天延二年(九七四)——寛仁四年(一〇二〇)47。大納言藤原道綱子。母は源広女。慈恵の弟子。阿闍梨。天王寺別当。道命法師集。玄々集。後拾遺集初出。

○登蓮(とうれん)——法師

一首

四一五

生没年未詳。系譜不詳。仁安く治承頃活躍。歌林苑会衆で、中古六歌仙の一人。恋百首。登蓮法師集。詞花集初出。

時綱(ときつな)源——

一首

九

道命——法師

三首

九・一八一・三六三

時綱源——

一首

二〇

生没年未詳。肥前守信忠男。従五位上肥後守。後拾遺集初出。

*二〇、天は「源時頼」。

○時信（ときのみぶ）平——

一首

二二五

久安五年（一一四九）没。知信男。崇徳天皇藏人。正五位下兵部権大輔。時忠らの父。

○時文（ときぶみ）紀——

一首

一四九

生年未詳。長徳三年（九九七）頃没か。貫之男。母は滋望女。入集歌は貞元二年（九七七）頼忠歌合出詠歌。後拾遺集初出。

*一四九、天は作者名なし。続詞花集二四六。

○俊忠（としただ）中納言——

一首

二二二

延久三年（一〇七二）—保安四年（一一三三） 53

(一説51)。大納言藤原忠家男。母は敦家女。俊成の父。従二位権中納言。太宰権帥。長治元年(一一〇四)家歌合主催。俊忠集。金葉集初出。

俊成(としなり)橘――

一首

四九

生没年未詳。讃岐守俊遠男。従五位下越中守。詞花集のみ。

○俊雅母(としまさのはは)左大弁――

一首

三二八

源頼綱女。詞花集のみ。

俊頼(としより)源――朝臣

一一首

○俊忠(としただ)度会――

一首

五一六

生没年伝未詳。

俊成 橘――

一首

七九

俊頼 源――朝臣

二六首

二六・三八・四二・五二・六二・一三五・一七四・

二七三・二七四・三四八・三四九

天喜三年（一〇五五）—大治四年（一一二九）75。

大納言経信男。母は源貞亮女。橘俊綱の養子。従四位上木工頭。俊恵の父。金葉集撰者。基俊と共に当代歌壇の重鎮。堀河百首。永久百首。俊頼髓腦。散

木奇歌集。金葉集初出。

二・二一・五〇・六一・七二・八一・一四〇・一五

五・一八七・二二一・二八三・二九一・二九二・三

五一・四八〇・四八一・四九一・五〇五・五三七・

五三九・五四一・五四五・五四八・五五〇・五五

五・五六六

*五五〇は詞花集では隆頼作（一四六）として入集。

○鳥羽院（とばいん）院御製

四七

一首

康和五年（一一〇三）—保元元年（一一五六）54。

堀河天皇第一皇子、母は実季女苺子。在位は嘉承二

年（一一〇七）—保安四年（一一二三）。第七四代

天皇。

*四七は統詞花集七〇。

○ともしと 藤原—

五二五

一首

○具平親王（ともひらのみこ）

一首

三〇一

応和四年（九六四）—寛弘六年（一〇〇九）46。村

上天皇皇子。母は庄子女王。後中書王・六条宮。博

学多芸の人。真字伊勢物語・弘決外典鈔。玄々集。

拾遺集初出。

な

○長国（ながくに）中原—

一首

三〇五

生年未詳—天喜二年（一〇五四）。大隅守重頼男。

五位肥前守。和漢兼作集。玄々集。後拾遺集初出。

仲実（なかさね）藤原—朝臣

一首

二六三

天喜五年（一〇五七）—永久六年（一一一八）62。

知郷か。

仲実 藤原—朝臣

三首

一七七・二二五・五三八

越後守能成男。正四位下中宮亮。堀河百首。永久百首企画者。綺語抄。古今集目錄。金葉集初出。

長実(ながざね) 贈左大臣 一首

二八四

承保二年(一〇七五)―長承二年(一一三三) 59。
六条顕季男。母は経平女(通俊妹)。美福門院の父。
権中納言。正二位八条贈左大臣。保安二年(一一二一)
一) 内蔵頭長実白河家歌合の主権。金葉集初出。

○永実(ながざね) 藤原― 一首

二一四

生年未詳―永久三年(保安元年(一一一五)―二〇)頃。
太皇太后宮大夫清家男。範永孫。従五位上信濃守。金葉集初出。

長実 贈左大臣 一首

五二

* 五二、書は「贈太政大臣」。

○長門(ながと) 待賢門院― 二首

二五八・四三〇

○中務（なかつかさ）

一首

一六六

延喜年間（九〇一〜九二二）―天禄（九七〇）頃
か。敦慶親王女。母は伊勢。中務集。後撰集初出。

○長能（ながとう）藤原―

二首

四五・一五二

天慶三年（九四九）頃―長和四年（一一〇一五）頃。
伊勢守倫寧男。道綱母の弟。従五位上伊賀守。花山
院側近。能因の歌の師で歌道師承の初めとなる。長
能集。玄々集。拾遺集初出。

○永範（ながのり）藤原―

一首

五六三

康和二年（一一〇〇）―治承四年（一一八〇）81。
文章博士永実男。千載集初出。

○仲房（なかふさ）源―

一首

長房（ながふさ）大蔵卿――

一首

五三

長元二年（一〇二九）――康和元年（一〇九九）71。

大納言藤原経輔男。母は資業女。正三位大蔵卿。後拾遺集初出。

仲正（なかまさ）源――

一首

三三五

治暦二年（一〇六六）頃――保延六年（一一四〇）頃か。三河守頼綱男。従五位下兵庫頭。頼政の父。特異な歌風の実力者。為忠百首。顕輔家歌合出詠。仲

三二九

生没年未詳。神祇伯顕仲男。母は俊輔女。入集歌は永久三年（一一一五）十月忠通歌合出詠歌で時に「淡路守」。

* 三二九、書は「源長房」。天は作者名、歌を欠く。歌合・他本より改む。

長房 大蔵――

一首

四四六

* 四四六、書は作者名なし。

仲正 源――

三首

一〇二・五三六・五四六

* 一〇二、天は「源仲延」。

正集は後世の編。金葉集初出。

○なびく くぐつ——

一八六

生没年系譜不詳。詞花集のみ。

一首

成助(なりすけ) 賀茂——

一九八

長元七年(一〇三四) — 永保二年(一〇八二) 49。
神主成真男。外従五位下。後拾遺集初出。

一首

成仲(なりなか) 祝部——

九三

一首

成助 賀茂——

三二五・三三七

二首

○成忠卿母(なりただぎょうのはは)

四一二

高階成忠女(儀同三司)のことと思われるが、「高内侍」(五二七)の名で入集している。不審。

一首

成仲 祝部——

四三二

一首

康和元年（一〇九九）―建久二年（一一九一）93。
日吉禰宜成実男。正四位上。白河尚齒会。別雷社歌
合出席。歌林苑とも関係が深い。成仲集。詞花集初
出。

*四三一、書は作者名なし。

○成平妻（なりひらのつま）賀茂―

一首

五二三

生没年未詳。

成通（なりみち）大納言―

二首

成通 大納言―

四首

一九六・三七七

八二・一七六・三三六・五二〇

承德元年（一〇九七）―応保二年（一一六二）頃。

大納言藤原宗通男。母は顯季女。正二位大納言。平

治元年（一一五九）63で出家。詩歌に秀で、郢曲・

蹴鞠の名手。成通集。金葉集初出。

に

○如覚（によかく）―法師

二首

仁祐（にんゆう） 律師——

二五九

生没年未詳。若狭守通宗子。家実子とも。詞花集のみ。

一首

の

能因（のういん）——法師

五九・一六四・二〇五・三三四

四首

永延二年（九八八）——没年未詳。永承五年（一〇五〇）生存。長門守橋元愷（為愷説も）子。長能を師とし、歌道師承の先例を作った。二六歳頃出家。

四五〇・五一〇

*少将藤原高光としても二首入集（二〇九・二五五）。

○仁せう（にんしょう）——法師

五七九

生没年未詳。

一首

仁祐 律師——

四〇四

一首

能因——法師

二四二・二五二・五一四

三首

*書は八五を「能因法師」の作とする。

後、各地を行脚。和歌六人党に影響を与えた。玄々集・能因歌枕を編。能因法師集。後拾遺集初出。

○範兼（のりかね）藤原—— 一首

一三七

嘉承二年（一一〇七）—長寛三年（一一六五）59。
能兼男。和歌童蒙抄、五代集歌枕を著す。千載集初出。

* 一三七、書は作者名なし。

○義忠（のりただ）藤原——朝臣 一首

一五四

生年未詳—長久二年（二〇四一）。大和守為文男。
正四位下左中弁。吉野川で溺死。東宮学士たるによ
って贈参議。玄々集。後拾遺集初出。

○範綱（のりつな）藤原—— 一首

二三九

散位永雅男。從五位上右馬助。本名雅清。詞花集初出。

教長(のりなが) 右近中将—— 二首

三〇・三五

天仁二年(一一〇九)——没年未詳。治承四年(一一八〇)頃、72か。大納言藤原忠教男。母は源俊明女。正三位参議。崇徳院近臣で保元の乱後、常陸に配流。赦免後、帰京して歌壇活動に戻る。詞花集批判の拾遺古今の撰者。万葉抄・古今集注。貧道集。詞花集初出。

範永(のりなが) 藤原——朝臣

二首

四〇・三二七

生没年未詳。尾張守仲清男。母は永頼女。延久二年(一一七〇)頃出家、間もなく没か。正四位下摂津守。和歌六人党の一人で多彩な活動をした。範永集。後拾遺集初出。

教長 左近衛中将—— 九首

五一・二八〇・二八四・三〇〇・三〇一・四六五・

四七五・四八七・五三五

範永 藤原——朝臣

一首

六一

○教良母(のりよしのはは) 藤原――

一首

三五八

生没年未詳。賀茂成継女。教良は忠教の子。詞花集のみ。

は

榎子内親王(ばいしなしいんのう)

一首

一一四

長暦三年(一〇三九)――嘉保三年(一〇九六) 58。

後朱雀天皇皇女。母は中宮姫子(敦康親王女)。六

条斎院。賀茂斎院。外祖父頼通の庇護により同家で

は多くの歌合が催された。詞花集初出。

ひ

肥後(ひご) 太皇太后宮――

二首

四七・三七三

生没年未詳。永久四年(一一一六)七〇代半ば。永久百首出詠。従五位下肥前守藤原定成女。肥後守藤

榎子内親王

一首

一六六

肥後 太皇太后宮――

二首

八三・五七〇

原実宗妻。常陸とも。関白師実、皇后宮令子に出仕。堀河百首、艶書合。肥後集。金葉集初出。

ほ

堀河（ほりかわ）待賢門院—— 二首

六三・三一四

生没年未詳。神祇伯顯仲女。前齋院（令子）六条・堀河局・伯女とも呼ばれた。久安百首。堀河集。金葉集初出。

○兵衛（ひょうえ）待賢門院—— 四首

六八・一五〇・二七九・三五六

神祇伯顯仲女。堀河の妹。待賢門院没後は上西門院統子に仕えた。久安百首。金葉集初出。

*一五〇、天は作者名なし。

○法祐（ほうゆう）——法師 一首

一二八

堀河 待賢門院—— 一七首

三・三八・九九・一〇〇・一二三・一二四・一五

二・一七一・二六一・二七四・二七七・二七八・三

九七・四二二・四七〇・四七一・五八八

○正家(まさいえ) 藤原——朝臣 一首

一五三

万寿三年(一〇二六)——天永二年(一一二一) 86。

家経男。式部大輔。金葉集初出。

○相方(まさかた) 源——朝臣 一首

八七

生没年未詳。左大臣重信男。母は朝忠女。従四位上

権左中弁。拾遺集初出。

○雅兼(まさかね) 治部卿—— 二首

二〇二・三二三

承暦三年(一〇七九)——康治二年(一一四三) 65。

源顕房男。長承三年(一一三四) 治部卿、翌年出

家。薄雲中納言。雅兼集。金葉集初出。

雅定(まささだ) 右大臣

二首

九五・二四五

嘉保元年(一〇九四)―応保二年(一一六二) 69。

久我太政大臣雅実男。号中院入道右大臣。久安六年

(一一五〇) 右大臣。仁平四年(一一五四) 出家。

顯季が義父に当り、六条家系歌会・歌合での活動が多い。金葉集初出。

雅定 中院右大臣

二首

一三三・三〇三

○雅親(まさちか) 藤原―

一首

三四一

生没年未詳。入集歌は保延元年(一一三五) 家成家歌合の作。長承三年(一一三四) 九月顯輔家歌合に名がみえる。

*三四一は統詞花集五〇〇。

雅光(まさてる) 源―

二首

一一七・三三〇

寛治三年(一〇八九)―大治二年(一一二七) 39。

雅光 源―

三首

一七九・三〇七・三九五

六条右大臣頭房男。母は清円女。従五位上治部大輔。忠通家歌合の常連。金葉集初出。

○正言(まさとき)大江—— 一首

三九一

生没年未詳。大隅守大江仲宣男。以言・嘉言の兄。一時弓削を称す。玄々集。後拾遺集初出。なお、詞花集三九一は拾遺集三五〇(ゆげのよしとき)と同
一歌。

○政平(まさひら)賀茂—— 一首

三四五

生年未詳—安元二年(一一七六)。神主賀茂成平男。歌林苑など承安前後の歌会に出詠。詞花集初出。

匡房(まさぶさ)大蔵卿—— 一首

一・二二・六六・一二三・一三三・一五三・一五六・一九〇・二七八・三〇七・三四二・三七〇・三

匡房 大蔵卿—— 一二首

一七・四四・五九二・一九四・二二七・二二九・二四一・三一六・三六四・四四四・四六二・五二八

七八・四一六

長久二年（一〇四二）—天永二年（一一二二）71。

從四位下大江成衡男。母は橘孝親女。正二位權中納

言。太宰權帥。白河・堀河朝の代表的な儒者・歌

人。江談抄等著書が多い。堀河百首。江帥集。後拾

遺集初出。

正通（まさみち）橘——

一首

一一三

生没年未詳。少納言匡利男（実利男とも）。正四位

下宮内丞。天祿三年（九七二）規子内親王前裁合講

師。詞花集のみ。

み

正通 橘——

一首

一四八

○三河（みかわ）関白家——

一首

三二〇

生没年未詳。源仲政女。頼政の妹。忠通家の女房。

金葉集初出。

○道綱（みちつな）大納言—— 一首

二〇八

天曆九年（九五五）—寛仁四年（一〇二〇）66。法
興院藤原兼家男。母は倫寧女。道命阿闍梨の父。玄
々集。後拾遺集初出。

○道綱母（みちつなのはは）大納言—— 二首

二八一・三二三

承平七年（九三七）？—長徳元年（九九五）。陸奥
守藤原倫寧女。長能姉、兼家の妻。蜻蛉日記。道綱
母集。玄々集。拾遺集初出。

道経（みちつね）藤原—— 二首

一七六・二三四

生没年未詳。頭綱男。従五位上和泉守。俊成の祖母
の弟。俊成を基俊に入門させた。金葉集初出。

*三二〇は統詞花集六一五。

道経 藤原—— 五首

一三六・一五六・二五四・三五五・三六五

通俊（みちとし）中納言――

二首

六八・二六八

永承二年（一〇四七）――康和元年（一〇九九）53。

大式藤原経平男。白河院近臣。後拾遺集撰者。後拾遺集初出。

○道長（みちなが）入道前太政大臣

一首

一六一

康保三年（九六六）――万寿四年（一〇二七）62。藤原兼家男。母は時姫（中正女）。御堂関白集。玄々集。拾遺集初出。

道济（みちなり）源――

六首

一六・七七・一〇七・二一九・二九六・三三七

生年未詳――寛仁三年（一〇一九）。佐渡守方国（有国とも）男。信明孫。正五位下筑前守。長能と共に拾遺撰集に助力。道济十体。道济集。玄々集。本朝麗藻・本朝文粹。拾遺集初出。

通俊 中納言――

三首

一〇一・二二〇・三九九

道济 源――

二首

一一二・一二五

道信（みちのぶ）藤原——朝臣 一首

二二三

天禄三年（九七二）——正暦五年（九九四）23。恒徳公為光男。母は伊尹女。従四位上左中将。美濃守。道信集。玄々集。拾遺集初出。

○登平（みちひら）源—— 一首

三一

生没年未詳。肥後守為親男。為憲甥。寛仁三年（一〇一九）土佐守。従五位。能因の友。玄々集。詞花集のみ（金葉集三奏本と重複歌）。

○道雅（みちまさ）左京大夫—— 一首

道信 藤原——朝臣 一首

六七

○通憲（みちのり）高階—— 一首

三四九

生年未詳。平治元年（一一五九）横死。藤原実兼男。経敏の養子。信西入道。

一四九

正暦三年（九九二）—天喜二年（一〇五四）63。帥
内大臣藤原伊周男。從三位。八条山庄障子絵合。玄
々集。後拾遺集初出。

明快（みょうかい）天台座主——

一首

九八

寛和元年（九八五）—延久二年（一〇七〇）86。文
章生俊宗子。第三三世座主。大僧正。後拾遺集初
出。

○民部内侍（みんぶのないし）

一首

一七二

生没年系譜不詳。金葉集初出。

○美作（みまさか）前皇后宮——

一首

一三

生没年未詳。美作守源資定女。母は出羽弁。後冷泉
皇后寛子に仕える。後拾遺集初出。

明快 天台座主——

一首

一四三

む

致経(むねつね) 平——

一首

三三六

生没年未詳。平安中期の人。中宮大夫致頼男。六位

左衛門尉。詞花集のみ。

も

致経 平——

一首

五二四

○望城(もちぎ) 坂上——

一首

九三

生年未詳—貞元三年(九七八)。是則男。梨壺五人

の一。拾遺集初出。

○以言(もちとき) 大江——

一首

三六六

天曆九年(九五五)—寛弘七年(一〇二〇)56。仲

宣男。正言弟、嘉言兄。従四位式部大輔。中関白家

に親しく仕え、伊周失脚で左遷。玄々集。本朝麗

藻。詞花集のみ。

元真（もとぎね）藤原——

一首

三五

生没年未詳。甲斐守清邦男。従五位下丹波介。天徳内裏歌合。元真集。後拾遺集初出。

元輔（もとすけ）清原——

六首

一六七・二三五・二五六・三四四・三九八・三九九
延喜八年（九〇八）—永祚二年（九九〇）83。下野守春光男。清少納言の父。従五位上肥後守。梨壺の五人の一人。天徳歌合。師輔家屬合。元輔集。拾遺集初出。

元任（もととう）橘——

一首

八四

生没年未詳。能因法師（橘永愷）子。五位少内記。後拾遺集初出。

元真 藤原——

一首

四八

元輔 清原——

四首

二三五・三九二・四一五・四七三

元任 橘——

一首

一二七

基俊（もととし）藤原——

一首

二六四

康平三年（一〇六〇）—永治二年（一一四二）83

（89など諸説）。大宮右大臣俊家男。母は高階順業

女。従五位上左衛門佐。俊頼に対抗した歌壇の指導

者。和漢に通じる。堀河百首。新撰朗詠集撰者。基

俊集。金葉集初出。

○盛経（もりつね）藤原——

一一

一首

生没年未詳。紀伊守成経男か、従五位上。詞花集の
み。

基俊 藤原——

一五首

三六・七三・九〇・一五七・二九八・五九五・三二

七・三七四・四〇九・四五三・四八八・五四七・五

五三・五五四・五七八

*三二七、四八八、天は作者名を欠く。

五五三は統詞花集六〇二。

○盛房（もりふさ）藤原——

一八九

一首

生没年未詳。なお、入集歌を送った相手は出家後の
橘資成（後拾遺集作者）。

師賢(もろかた)源——朝臣

二首

二八・三九

長元八年(一〇三五)——永保元年(一〇八一)47。

参議資通男。母は源頼光女。正四位下左中弁。俊綱
伏見山庄歌会など出詠。後拾遺集初出。

○師実(もろざね)京極前太政大臣

一首

一九

長久三年(一〇四二)——康和三年(一一〇一)60。

宇治関白藤原頼通男。従一位関白。嘉保元年(一一〇
九四)高陽院七番歌合を主催。京極関白集(断簡現
存)。後拾遺集初出。

師賢

一首

二六〇

*二六〇、天は「源師資朝臣」。

○師時(もろとき)中納言——

一首

九二

承暦元年(一〇七七)——保延二年(一一三六)60。

俊房男。母は源基平女。堀河百首。金葉集初出。

○師俊（もろとし）前中納言—— 二首

一八三・四六七

承暦四年（一〇八〇）—永治元年（一一四一）62。

俊房男。母は平重経女。長承四年（一一三五）権中

納言。金葉集初出。

*一八三、書は「前中納言師頼」。四六七は諸本とも作者を「中納言師頼」とするが、統詞花集一八八、袋草紙などによって師俊の作とする。

師頼（もろより）大納言—— 三首

二八二・二八三・三四一

治暦四年（一〇六八）—保延五年（一一三九）72。

堀川左大臣源俊房男。俊綱養子。小野宮大納言。正

二位。堀河百首。忠通家歌合に出詠。金葉集初出。

や

康資王母（やすすけおうのはは） 二首

一八・二〇

師頼 大納言—— 三首

一九・一六八・四四五

康資王母 二首

四五・四一八

嘉承元年（一一〇六）以降没か。筑前守高階成順女。母は伊勢大輔。四条宮寛子女房。筑前・伯母ともいう。高陽院歌合で活躍。伯母集。後拾遺集初出。

ゆ

有禅（ゆうぜん）法橋——

一首

一七九

応徳元年（一一〇八四）——大治元年（一一二六）43。
永縁子。興福寺花林院得業。詞花集のみ。

行宗（ゆきむね）大蔵卿——

一首

二八六

康平七年（一一〇六四）——康治二年（一一四三）80。
参議源基平男。行尊の弟。崇徳院側近で初度百首出詠。行宗集。金葉集初出。

* 四一八は統詞花集三九八。ただし、金葉集二度本に「知陰」の作としてみえる。

有禅 法橋——

一首

二五六

* 「読人しらず」の六六は有禅の作。

行宗 大蔵卿——

一首

三六七

よ

永縁（ようえん）権僧正——

一首

一八五

永承三年（一〇四八）—天治二年（一一二五）78。

大藏大輔藤原永相子。母は大江公資女。永源と兄弟。興福寺別当。花林院権僧正。初音僧正と呼ばれた。堀河百首。奈良歌林院歌合主催。金葉集初出。

永源（ようげん）——法師

一首

一一九

生没年未詳。藤原永相子。母は大江公資女。永縁と兄弟。東大寺僧。承保三年（一〇七六）経仲家歌合出詠。後拾遺集初出。

義国妻（よしくにのつま）源——

一首

三八〇

生没年未詳。大江有元女。義国は久寿二年（一一五

永縁 権僧正——

二首

二五〇・四九〇

*四九〇は統詞花集九一五。

永源——法師

一首

一四六

義国妻 源——

一首

五三三

*五三三、書は「源よしくにか女」。

五) 没。詞花集のみ。

義孝(よしたか) 少将――

一首

三九六

天曆八年(九五四)――天延二年(九七四) 21。謙徳公伊尹男。母は恵子女王。行成の父。義孝集。拾遺集初出。

好忠(よしただ) 曾禰――

一七首

五・七六・七八・八一・八二・一一〇・一一八・一

二九・一三三・一四〇・一四一・一四七・一六〇・

二三〇・二四七・三一八・三八五

延長(九二三)頃――長保(一〇〇四)頃の人。六位

丹後掾。毎月集。曾丹集。玄々集。拾遺集初出。

嘉言(よしとき) 大江――

五首

一〇四・一〇八・一四四・一五五・三〇二

生年未詳――寛弘七年(一〇一〇)。大隅守仲宣男。

義孝 少将藤原――

一首

四一四

好忠 曾禰――

九首

一六・一〇七・一四七・一八二・一九〇・三三八・

二九九・三五九・三七五

嘉言 大江――

二首

一三〇・二三九

時弓削氏を称す。正言・以言の弟。嘉言集。玄々一集。拾遺集初出。

能宣(よしのぶ) 大中臣——朝臣 八首

三六・四四・八九・一三八・一六三・二二五・二八

九・三七四

延喜二二年(九二二)——正暦二年(九九二)71。祭

主大中臣頼基男。正四位下祭主。梨壺の五人の一

人。能宣集。拾遺集初出。

能元(よしもと) 橘—— 一首

一三一

生没年未詳。散位忠元男。能因の曾孫。從五位下。

金葉集初出。

読人しらず 二四首

四六・七四・一四八・一七〇・二〇二・二〇三・二

〇四・二二六・二三八・二五一・二六六・二六七・

能宣 大中臣——朝臣 七首

五三・七七・二二一・二三二・二九四・四五四・五

一九

能元 橘—— 一首

二六九

読人知らず 七〇首

一四・一五・二七・二九・三五・五七・六六・七

〇・七一・七四・七五・一一〇・一一一・一一五・

二七一・二九一・三二三・三一五・三六四・三七二
(西行)・四〇〇・四〇五・四〇六・四〇八・四〇
九・四一二。

*なお、一九七(寛念法師)が「読人しらず」の伝本がある。

頼家(よりいえ)源——朝臣

六四・二七二

二首

生没年未詳。後一条—白河朝の人。中宮進源頼光
男。母は平惟仲女。従四位下筑前守。頼通家家司。
和歌六人党の一人。後拾遺集初出。

一六一・一六三・一七〇・一七三・一七四・一八
六・二二一・二二六・二七五・二七六・二八六・二
八七・二九三・二九六・三一・三二〇・三二一・
三二六・三三〇・三三三・三三四・三三五・五九
六・三六一・三八一・三八四・三九四・三九六・三
九八・四〇〇・四〇二・四〇三・四〇八・四一六・
四二〇・四二六・四二八・四二九・四三一・四三
五・四四九・四五五・四六九・四九七・五〇三・五
一一・五一二・五一五・五二九・五四〇・五五一・
五七四・五七五・五七七・五八五・五九〇
*うち寂然六首、有禪一首、有仁北方一首(四四九)。

頼家 源——朝臣

四七九

一首

○頼実(よりさね)源—— 一首

五六九

長和四年(一〇一五)―寛徳元年(一〇四四) 30。

頼国男。母は藤原信理女。六人党の一人。故侍中左

金吾集。後拾遺集初出。

* 五六九は統詞花集三六一。

頼綱 源―朝臣 一首

一三一

* 一三一、東北大学本詞花集、書は「藤原顯綱」とする。出典の高陽院七番歌合では源頼綱。

頼綱(よりつな)源―朝臣 一首

一〇一

万寿元年(一〇二四)―永長二年(一〇九七) 74

か。左馬権頭頼国男。母は仲清女。従四位下三河

守。後拾遺集初出。

頼政(よりまさ)源 一首

一七

長治元年(一一〇四)―治承四年(一一八〇) 77。

兵庫頭伸正男。母は藤原友実女。仲綱・二条院讃岐

の父。従三位右京権大夫。歌林苑会衆。為忠百首、

頼政 源—— 二首

三二二・三五二

兼実百首。平等院で戦死。頼政集。詞花集初出。

○頼通（よりみち）宇治前太政大臣 一首

三八六

正暦三年（九九二）—承保元年（一〇七四）83。御堂藤原道長男。母鷹司殿倫子。後一条・後朱雀・後冷泉三代の摂政、関白。歌壇の庇護者。玄々集。後拾遺集初出。

○頼光（よりみつ）源—— 一首

四六六

天曆二年（九四八）—治安元年（一〇二二）74。満仲男。母は源俊女。拾遺集初出。

頼宗（よりむね）堀川右大臣 三首

一三〇・二七九・三九三

正暦四年（九九三）—康平八年（一〇六五）73。御堂藤原道長男。母は明子（高松殿。源高明女）。後

頼宗 堀川右大臣 九首

六四・六五・一二二・一七二・一七八・三七三・四一三・五二一・五二二

冷泉朝、兄頼通時代の歌壇を支えた。入道右大臣集。玄々集。後拾遺集初出。

○頼保(よりやす) 藤原——

一九九

一首

生没年未詳。六条藤家の家保男。家成弟。正五位下武藏守。家成家歌合出詠。詞花集のみ。

ら

○頼仁(らいにん)——法師

三三二

一首

生没年伝未詳。

り

隆恵(りゆうえ)——法師

一八九

一首

生没年未詳。天台僧。保延四年(一一三八)阿闍梨宣旨。詞花集のみ。

隆恵——法師

三三四

一首

隆縁（りゅうえん）——法師 三首

一〇三・二〇九・二二〇

生没年未詳。但馬守藤原隆忠子。頭季の甥。叡山。

久安五年（一一四九）家成家歌合出詠。詞花集のみ。

隆源（りゅうげん）——法師 一首

一一五

生没年未詳。白河院期の人。若狭守藤原通宗子。通

俊の甥で、後拾遺撰集に協力。園城寺。阿闍梨。堀

川百首。隆源口伝。金葉集初出。

良暹（りょうせん）——法師 六首

六九・九一・一〇〇・二九四・三六一・三六七

生年未詳—康平年間（一〇五八—六四）67—68か。

叡山祇園別当（作者部類）。俊綱伏見山荘に出入。

良暹打聞（散佚）。後拾遺集初出。

隆縁——法師 三首

三四八・三八五・四八四

隆源——法師 三首

四・八四・一六四

良暹——法師 六首

九七・一三九・四三八・四六八・五一七・五一八

○琳賢(りんけん)——法師

一首

三〇六

延久(二〇七〇)頃—没年未詳。保延四年(一一三八)生存(60代か)。橘義濟子。叡山僧。石立(造園)僧として知られる。金葉集初出。

れ

○冷泉院(れいぜいいん)——御製

一首

三三二

天曆四年(九五〇)—寛弘八年(一〇一一)62。村上天皇皇子。母は中宮安子。諱憲平。第六三代天皇。冷泉天皇御集。詞花集初出。

○蓮寂(れんじやく)沙弥——

一首

三七一

和歌色葉は讚岐守願綱子、俗名道経、作者部類は和泉守道経子とする。詞花集のみ。

後葉和歌集の序について

「詞花集・後葉集 対照作者索引」を掲載するにあたり解説に代えて、後葉集の序について以下に考察する。

一

後葉和歌集（以下、後葉集と略す。他集も同様）は詞花集を「破る」（和歌色葉に「詞花集を破たる為経の後葉集」とあるなど）という方法で非難した私撰集である。藤原為経（寂超）の撰、成立は久寿二年（一一五五）十一月（翌年正月）。

後葉集の伝本は次の二種類に分けられる。

〈一類〉 孤本、二〇巻完本。新編国歌大観底本。

書陵部蔵本（五一〇・三三）

〈二類〉 十九、二十巻を欠く。

天理図書館蔵本（九一一・二三・イ一四三）片カナ本

彰考館本、静嘉堂松井文庫本、神宮文庫本、三手文庫本、類従本その他数本。

さて、後葉集について、すでにいくつかの研究がなされている（本稿で（注）としてあげたような諸論）。先学の臆尾に付し序文を読解することにより、撰集の意図について検討したい。

二

まず、後葉集序文を掲出するが、底本は二類本（天理図書館蔵本により、他本との異同は必要に応じて注記する）を用い、一類本との校異を左傍（ ）内に示す。内容から三段落A・B・Cに分け、第二段落目をさらにa b c dの四つに分けた。便宜上、句読点および濁点を付した。

A

イソノカミフルキ人ノコトワザヲタヅネ、カハタケノナガレヒサシキヨ、ヲキクニ、ヒジリノミカド、カシコキオホムトキ、ヒトツコ、ロヲワキマヘ、クニノマツリゴトヲシロシメスコト、シキシマノヤマトウタニナムアリケル。シカアルヲ、トキクダリ人オロソカニナリニケルヨリ、ナニハヅニヨセテキミヲソエタテマツルアトナラヒガタク、ヨシノ山ヲカケテ人ヲシタフオモヒイカ^(人の)マレニナリニケリ。イマ、ソガギクノイロナ^(なほ)カハヒトタビスミテ、ムカシノニホヒサ^(まらじ)ニノコリ、ナラノハノナニオヘルミヤ^(ふた)ヒラケテテ、イニシヘノカゼアラタニ^(たし)ハレルヨニアヒテ、スタレタルミチヲイタミ、フルキアトヲコフルトモガラ、カミツカタノスベラギニツカヘマツルヨロコビヲイダカズトイフコトナシ。カクテノチ、ヨツノウア^(をしよる)ナミラスマシテ、ムナシキフネ、ナガレニアソバシムルウチニ、サキ^(よつ)ノシフニイラザルウタドモエラビタテマツルベキミコトアリテ、コトノハノハナトイヘル集ヲアラタニエラビイダサレニケリ。

B

a

山ガツノシヅノカキネニカゼノツテニチレルヲヨロコビテ、オリノヒラキテ、ハルノツレノラナグサメ、アキノ

の間に

アハレヲソフルニ、イニシヘノ人ヲツラネイレラレタルハフジノネノケムリヨリモタカクシテ、ツクバネノコノモカ
類本は「しほくもてあそびて」とある

ノモニマジリ、イマノヨノウタヲエラビノセラレタルハユフヅクヨオボロケナヌハトラレヌニヤトミエナガラ、ア
キヤマノシカスガニオボユルモトコロ、(い まよ)マジハレルヲ、タマツバキアラタメエラズベキミコトアリトハ、ハナス、

キホノカニキコエワタリシカドモ、カリガネノツラネアツメタリシ人モユフベノソラノクモニマジリ、シギノハネガ
キナラサレムコトモアリアケノ月ノサヤカニモキ、サダメネバ、コノモトニコレルコトノハモクチハテヌベク、イ
ハマニヨドムミヅノコ、ロモカキナガスカタナクテ、オイノミノシモライタゞケルカナヒワワスレテコトノハノカゼ

ニタグハムコトヲオモフアマリニ、カノ集(かたなく)ノナカニワカノウラナミコ、ロヨリヌベク、モジノセキヂノメトゞマルヲ
バ、ワタクシノモテアソビモノニアテムトテオモヒウルニマカセテカキイダシタリ。

(たがはむ)
(もてあそびもの)

コノホカノウタノ春水トゞコホリスクナク、アキノカゼキ、ドコロアルヲバ、カサネテサメヲカレムソナヘニモヤト

テ、キ、ヲヨブニシタガヒテツラネイレタリ。(あまき風の)
(ただめおかれむに)

又、カノフルキガナカニ、コ、ロフカクコトバタクミナルガオホクマジハリテミユルヲ、イケミヅノモラサズ、ミナ

レサホトリエラズベケレドモ、チカキ撰集フルキニユヅリテトラレヌホドノ集ニイレルヲバ、マサキノカヅラクリカ

ハシ、ツキクサノウツシアヘガタケレバ、コ、ロニハソメナガラトラズナムナリヌル。(ちかきよの撰集に)
(いろいろ)

イヤシクモフルキウタノアトヲネガヒ、ノコレルコトノハラアツメテコフエフ和歌集トナヅケテ、ワカチテハタマキ

トセリ。(後葉和歌集)

C

ソモノ／＼カキノモトノツタヘアラズ、ナシツボノツユニモウルハジテ、モトアラノハギノモトアラ／＼ミダリシコト
 モ、フルカラヲノ、フリハテニタレバ、ワスレミヅワスレノミユキツ、(あがず)クレハドリアヤマリオホカラムコトイニシ
(うるはずして)
 ヘニハヂ、イマニオソレオモヘドモ、ハヤカリノセキノハヤカリナガラ、ミヅクキノカキナガシツルコトニナムアリ
 ケル。ナツクサノカリノスサミニハアレドモ、オホアラキノモリイヅルコトモアラバ、アザケリシゲキツマトノミナ
 リハテヌベキコトナラムカシ。(たると)
 待ぬべきことならんかもし。(やなり)

注||傍線部について他の二類本は次の通り

いかゞ

いづちかは(つちミセケチ「ろなにか」)

さてより(さミセケチ「まいかんに残るカ」)

□□□ひひらけて(「汚損イ同」)

□□□(「つたい」)

よつのうらなみを

歌にかきあらためえらぶべき

かなひ(よはひイ)

後葉

以下に必要な語釈をする。主に修辞技巧を掲げる。歌集名と歌番号は参考となる用例。

いそのかみ 枕詞 後葉集・六二

かはたけの 枕詞 金葉集二・三九七

ひじりのみかど 神聖な靈力を左右できる天皇。朗詠百首・五四

ひとつどころ 「ひとのこころ」か。

しきしまの 枕詞

なにはづによせてきみをそへたてまつるあと 古今集仮名序をふまえる、古今への復帰を意識した表現か。
よしの山をかけて人をしたふおもひ 古今集仮名序をふまえる。

そがぎくの 承和の菊、仁明天皇の好んだ菊。俊頼髓腦など。仁明朝を理想とする表現か。

むなしきふね 上皇の異称。後拾遺集・一〇六二

つくばねのこのもかのも 古今集・一〇九五

ゆふづくよ 枕詞 金葉集二・四八三

あぎやまの 枕詞 後葉集・一三五

たまつばき 枕詞 新勅撰集・四四七

はなすすき 枕詞 拾遺集・七三二

かりがねの 枕詞 「つらね」にかかる。

しぎのはねがき 鳴が羽虫を取るためくちばしで羽をしごくこと。「かきなほす」にかかる。
なをされむこともありあけの月のさやかにも…… 掛詞・序詞

このもとたのこれることのは…… 掛詞・縁語

わかのうちらなみころよりぬ 縁語

もじのせきぢのめとどまる 縁語 金葉集二・三七九

いけみづのもらさず 縁語

みなれざほ 枕詞 後葉集・二九六

まさぎのかづらくりかへし 序詞

つきくさの 枕詞

もとあらのはぎのもとあらあら 序詞 後葉集・一六〇

ふるからをの……わすれみづ 古今集・八八六、俊頼「五月雨のふるからをのわすれみづおしひたすらのぬまえとぞみる」などの表現をふまえる。

くれはどり 枕詞 後葉集・三六二

はばかりのせき 序詞 後拾遺集・一一三六

みづくきの 枕詞 今撰集・一一五「思ふことくみてしれかしみづくきのかきながしてはひともしれ」は、その

例。

なつくさのかりの……おほあらしのもりいづる…… 古今集・八九二、後拾遺集・二二八「なつふかくなりぞしにけるおほあらしのもりのしたくさなべて人かる」などをふまえる。後葉集・一九九

Aは「当代」（崇徳院の時代をいう。後葉集成立時はすでに後白河帝の代であり、それまでも治天の君は白河、鳥羽の兩院であるが、以下便宜的に「当代」と呼ぶことにする）を和歌を重んじる聖代の再来と位置づけ、詞花集撰集の経緯を述べる部分で、本集の内容・目的の前提となっている。当代賛美の表現は儀礼的文飾を考慮にいれて多少は割り引く必要があろうが、当代に対するこのような認識が以下の前提になっていることは注意される。さて、難解部分を含むB a b cの試訳をすると次のようになるかと思われる。

B a いやしいものの住処の垣根に風の便りによって散ってきたのを喜び、折々にひもとき（詞花集を自分が披見できたことをいう）、春のつれづれをなくさめ秋のあわれを加えたけれども、（こうして詞花集を見たけれども）昔の人を入集させたのをみると、富士山の噴煙よりも高く（重んじ）、筑波山の峯々のようにあちこちに交じり（優遇されている）、現代の作品の選び載せられているのをみると、よほどでない作品は採用されなと思われが、どうかनाと思われれるのも、ところどころに交じっているの、改め選ぶべきとの仰せがあると、わずかに聞いていたけれども、撰者であった人（顯輔）も亡くなって、撰集し直すこともはつきり聞き確かめることができない、そこで、私のもとに残っている和歌も朽ち果ててしまふであらうし、岩間に淀んでいる水のような（不満な）心もかきながす術がなく、老いの身の、霜をいただいた年齢を忘れて、この和歌（言の葉）が風にともなつて散つてしまふだろうことを思うあまりに、あの集（詞花集）の中に確かによと思われ、目を引く作品を個人的な賞翫物にしよう、考え付くに任せて書き抜いたのである。

b その他の歌の、春の水の流れのように滞ることが少なく、秋の風のように聞きどころある作を、再び決め置かれる備えにもなるかと聞き及ぶにしたがつて採用配列したのである。

c また、あの古い歌集（玄々集）の中に、心深く詞巧みなる歌がたくさん交わり見えるのを漏らさずに採り選ぶべきだけれども、近き撰集（詞花集）が古い歌集（玄々集）に謙譲して（「ユヅリテ」は遜り委ねての意味か）、採用できない程度なのに集（詞花集）に入っている作を、繰り返し移すことがむずかしかったので心にひかれながら採らないことにしたのである。

◆傍線部別案

詞花集入集歌のうち、古い時代の人の歌の中に……詞花集などが古い時代の人の歌に遜り採用できない位の（それほどでない作の意）で入集しているのを……

ただし、別案の「古い時代の人の歌」は後述のように結果的には主として玄々集歌を意味する。また、「トラレヌホドノ集ニイレル」の訳としては、a中の「オボロケナラヌハトラレヌニヤ……」を受ける。

aでは詞花集に対する不満とその歌を抜粋したこと、bでは新しい歌を追加配列したことを述べて、詞花集改選（詞花集四〇九首から二二四首を選び載せ、新たに三七二首を追加）について記す。cでは詞花集中から抜き出す際の方法、具体的には玄々集歌を採らなかつた事情を述べている。なお、dは名号について。このBが本集の意図するところ、すなわち、詞花集批判の核心であろう。

四

cの部分に注目して本集と玄々集との関わりを考えてみたい。

詞花集四〇九首中に玄々集歌六十五首が入集している。詞花集の特徴を示す代表的風体のひとつといえる。古来風体抄が詞花集から抜粋しているうちから例歌を拾うと次の如し。

宿近く花橋は植ゑて見じ昔を偲ぶつまとなりけり(七〇)

君まさば問はましものを津の国の生田の森の秋の初風(八三)

山深み散りても積もれる紅葉葉のかわける上に時雨降るなり(一四四)

霰降る交野の御野の摺衣濡れぬ宿貸す人しなれば(一五二)

いかでかは思ひありとも知らすべき室の八島の煙ならでは(一八八)

胸は富士袖は清見が関なれや煙も波も立たぬ日ぞなき(二二三)

夕暮れは待たれしものを今はただ行くらん方を思ひこそやれ(二七〇)

木の本を住処とすればおのずから花見る人になりぬべきかな(二七六)

代らんと思ふ命は惜しからでさても別れんことぞ悲しき(三六二)

「カノフルキ」が玄々集(あるいは玄々集歌)を指すことは、本集がこのような詞花集中の玄々集歌をすべて除去している事実⁽⁴⁾に照らしてまちがいないと思われる。

また、古来風体抄の詞花集評に次のようにある。

「……また、後拾遺より前、勅撰にはあらで私に撰べる集ども数多あるべし。能因法師は玄々集といひ、良暹法師は打聞といひ、また撰者誰れともなくて麗花集といひ、樹下集などいひて、数多あるを、後拾遺撰ぶ時、能因法師の玄々集をば、何とかありけん除けるを、詞花集には勅撰にあらねばとて、玄々集の歌を多く入れたればにや、後拾遺の歌よりも、たけある歌どもの入りて、集のたけもよく見ゆるを、また、今の世の人の歌のさまでならぬにや、殊の外⁽⁵⁾の歌どものまたあるとぞ人申すべき。……」

玄々集歌と詞花集の評価が深い関係にあることを示唆するよく知られたところで、「今の世の人の歌の……」あた

りは後葉集の序を意識した文かと思われる。上の試解は、この俊成の言をも勘案して理解したものだが、このように解釈すると、詞花集の特徴である玄々集歌の多数採用を否定することが後葉集の撰集意図の重要なひとつと考えられる。

五

後拾遺集（仮名序に「又ちかく能因法師といふものあり、心はなの山のあとをねがひてことばひとにしられたり、わがよにあひとしあひたるひとのうたをえらびて、玄玄集となづけたり、これらのしふにいらりたるうたは、あまのたくなはくりかへしおなじことをぬきいづべきにもあらざれば、このしふにのすることなし」とあって能因の撰集として尊重され撰集資料にはなっていない）以来の撰集における玄々集の受容史をみると、三奏本金葉集や詞花集の玄々集歌の採用は「イニシヘノ人ヲツラネイレ」⁽⁴⁾ するためのひとつの方法であったと思われる。とくに、詞花集の場合は撰集の根幹に関わる方法であったが、後葉集はあえて用いなかっただけでなく、⁽⁵⁾ できよう（後拾遺集の態度にならったとも考えられる）。なお、統詞花集にまで視野をひろげると、その方法は伝統として継承されていることが知られる。

以上のような選歌方法に対する批判の姿勢は、序文Aにみえるように当代を聖代と讃え、またBaにみえる撰集の動機からも知られるように、「いま（撰集時）」⁽⁶⁾ 重視の主張につながっている。

「イマノヨノウタ」とは、今撰集の選歌範囲（上限は保安二年へ一一二一）花見御幸歌）をみても、おおよそ崇徳院時代を指す。即ち、当然ながら後葉集の当代である。

この時期（保元の乱直前）に積極的な当代重視の認識が明かに窺えることは和歌史の上で看過できない意義を持っていると思われるが、ここでは、すでに指摘されていることをあらあら確認したに過ぎない。撰者の歌壇的位置などを配慮すべきで、今後に残された課題は多い。

(1) 後葉集の成立時期について、樋口芳麻呂「詞花和歌集雜考」(愛知学芸大学『国語国文学報』昭和三〇年)・佐藤明浩『後葉和歌集』の構成および性格」(『待兼山論叢』第二十二号、昭和六三年)などを参照。ちなみに後葉集の意義について、谷山茂著作集三『千載和歌集とその周辺』解説(四七七ページ、樋口芳麻呂氏執筆)を次にあげておく。

「詞花集をめぐる対立」(『人文研究』昭和三八年六月)は、勅撰集批判には「難」「破」の二方法があり、同じく詞花集への不満を明白にしても、詞花集歌を自集に取り込むことはせず、撰者の古今集崇拜の古典主義的立場を明示することによって、間接的微温的に非難した拾遺古今は「難」、詞花集の歌を二百十八首も収載し、詞花集を改選することによって、直接的に激しく攻撃した後葉集は「破」に該当することを、実に綿密精緻に論証している。なお、後葉集の後に撰せられた統詞花集についても、後葉集などと詳しく対比しつつ、その特質を明らかにしている。そして、「詞花集をめぐる教長・為経・清輔らの対立抗争が、単なる空論でなくて、このように私撰集という具体的ななかたちで繰返されたからこそ、千載集における統一も比較的成し遂げやすかったのではなからうか」の鮮やかな結語で閉じられている。

なお、松野ゼミ「平安末期私撰和歌集の研究5」(立正女子短期大学『文芸論叢』8、昭和四七年)には詞花集と後葉集との比較検討がなされている。

(2) 後葉集の伝本については、松野陽一「後葉和歌集本文考」(『平安朝文学研究』昭和四六年一月)が詳細に論究している。

松野論文によれば「本文字句の性質をも含めて、天理本が、他の乙類諸本の全ての祖本であると断定してよいと考える。」とあり、天理本は鎌倉初期写の最善本である。

(3) 工藤重矩「詞花和歌集―後葉集―からの照射」(『国文学』昭和六二年四月号)は序の要点を次のようにまとめる。

一 『詞花集』には古人は多く入集しているが、今の世の人はよほど良い歌でないを採用されていない。

二 それでも、どうかと感ずる歌も混っている、改撰すべしとの御言葉があったと仄聞しているが、撰者(頭輔)は没してしまい、その後改撰の沙汰についてははっきり知らない。

三 このままでは、集めてある歌資料が散逸する惧れがある。

四 それ故、1 『詞花集』の中の心ひかれ目とまる歌を個人的なものであそびにあてるために抜き出した。2 右の他に、滞

り少なく聞き所ある歌を重ねて改撰の沙汰ある場合の備えとして聞き及ぶに従って入れた。3 近き世々の撰集に資料とするのを遠慮したような古い集（注、具体的には玄々集をさす）の歌は、すばらしいとは思いつつも採らなかつた。

- (4) 樋口芳麻呂「詞花和歌雑考」（愛知学芸大学『国語国文学報』昭和三〇年）は「詞花集中の玄々集の歌六五首が一首も後葉集に見出されない。後葉集の撰者は玄々集の歌を意識して省いた様である」と述べ、詞花集に対する後葉集の不满を次の三項目に要約している。

1 詞花集が無味乾燥なざれ歌を多く加えたりして古今的な風雅から逸脱する傾向があるので古今への復帰を明らかにしようとした。

2 詞花集が古い時代の歌人の歌を多くとって、当代に重点をおいていないのでこれをあらためようとした。

3 父為忠の歌が一首も採られていない。

- (5) 谷山茂著作集三『千載和歌集とその周辺』解説（四七六ページ、樋口芳麻呂氏執筆）に次のようにある。

「金葉集と詞花集」（『国語国文』昭和二八年六月）は、「玄々集と金葉集三奏本」の統編をなす論文で、詞花集が玄々集の歌六十五首、金葉集三奏本の歌六十一首（ただし、うち四十四首は玄々集と一致する）を取載する意味を追求している。金葉集三奏本の歌は、玄々集と重複する歌を除いた部分も、おおむね後撰・拾遺ごろの作者の歌で、詞花集の特色をなす雑部への玄々集の影響の大きさとともに、三代集の様式の残照は軽視できないこと、また、「金葉・詞花の両集のみの時代様式的等類性は、むしろ三代集の様式を叙景歌の感覺美の方向に延長した世界においてこそ、把握」されるべきで、一方、それぞれの集の個性的様式の相違点は、両集撰者の個人的様式の周辺に要約され、「金葉集の個性的様式は特に鬼才俊頼の個人的様式の一つである『もみもみと人はよみおほせぬ』自由奔放な面に負うところが大きく、説得力に富む文章で述べは穩健な頭輔の詠歌述懐における個人的様式に結びついているところが多い」ことなどが、説得力に富む文章で述べられている。遠田昭良「統詞花集の特質に関する覚え書き」（『苦小牧高専紀要』昭和四三年三月）は、右の谷山論文などの影響下に、統詞花集中の玄々集歌の検討などを行っており、統詞花集が父頭輔の撰した詞花集の選歌方針を継承する一つの論拠に、玄々集歌の三十三首もの選入を挙げている。

- (6) 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』第三章「六 常磐三寂年譜考」によると、「……為忠家以外の歌の催しに出席せず、歌壇的な交わりがなく、広くその実績が知られていなかったのであろう。」（仁平元年詞花集成立の項）などがある。

なお、為経は後年であるが、その著である今鏡（承安四年八月十日以後五年七月以前成立……竹鼻積説・学術文庫）において、崇徳院について次のように記している。

帝の御心ばへ、絶えたることをつき、古きあとを興さむと思し召せり。幼くおはしましけるより歌を好ませ給ひて、朝夕に侍ふ人々に、隠し題詠ませ、紙燭の歌、金篋打ちて響きのうちに詠めなどさへ仰せられて、常は和歌の会ぞせさせ給ひける。（中略）百首の歌なむど、人々に詠ませさせ給ひけり。また撰集などもせ給ふと聞え侍りき。